**「を詠う」　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　山居　閑人**

　かっての文人の中には、老境に差し掛って残りの人生が短いことを悟ったとき、煩わしい宮仕えを辞め、静に自由な生活を送りたいと思う人多くいます。また、若くして官職に就くことを厭い、生活に入りたいと思った人もいます。生活を保証するだけの財産、収入があるとき、隠棲生活を送ることは、理想的な生き方とされていました。また、役職に就かず、閑適を求める世活を送る人もいました。

　これらの文人達の、隠逸生活、隠棲生活を謳歌する詩歌は多く残されています。これより、「閑適を詠う」と題しまして、これら多くの詩歌の中から、特に優れたものを紹介したいと思います。

　隠逸世生活を送った詩人の代表はです。陶潜は、家柄が貧しかったことにより、高い官職に就くことできず、若くして官職を投げ捨て、自ら農作業をしながら、多くの詩を残しました。「隠逸詩人」とよばれ、その生活態度、作られた詩が後世の詩人達に与えた影響は筆舌に尽くしがたいものがあります。特に「其の五」は千古の絶唱とされ、多くの詩に引用されています。

　最初に、**「飲酒其の五」**を紹介いたします。

**結廬在人境　　　をんでにあり**

**而無車馬喧　　　ものしきし**

**問君何能爾　　　にうぞくると**

**心遠地自偏　　　ければずからなり**

**采菊東籬下　　　をるの**

**悠然見南山　　　としてをる**

**山氣日夕佳　　　にく**

**飛鳥相與還　　　にる**

**此中有眞意　　　のにあり**

**欲辨已忘言**　　**ぜんとしてにをる**

　「飲酒其の五」は、「此の中に真意あり　弁ぜんと欲して已に言を忘る」という言葉で結ばれております。李白の「山中問答」は、この詩と、陶潜の有名な「」を融合して作られたものであり、ともに、「自分と同じ隠棲生活をしなければ自分の心は分からない」と述べています。**「山中問答」**を紹介いたします。

**問余何意棲碧山　　　余に問う　何の意あってにむと**

**笑而不答心自閑　　　笑うて答えず　からなり**

**桃花流水杳然去　　　　として去る**

**別有天地非人間**　　　**別に天地のにざる有り**

日本にも、李白と同じように、山中に隠棲している人の心を詠った詩があります。国分青厓の**「山中の歌」**です。俗世間を全く離れた生活の楽しみを詠ったこの詩を紹介いたします。

**問余山中棲幾年　　　余に問う山中にむことぞと**

**世間甲子如雲煙　　　世間の の如し**

**採薬歸来日猶早　　　薬を採りて帰り来たるも日 早し**

**獨聴松風眠石上**　　　**りを聴いてに眠る**

盛唐の時代に官職に就かず、隠棲生活を送った詩人としては、が有名です。孟浩然は、若い頃は盛んに就職活動を行っていましたが、結局、官職付くことができず、人生の後半を故郷で隠棲生活を送りました。その人柄と詩は、王維、李白、王昌齢などから尊敬を集めています。その代表作「春暁」には、夜明け前から役所に出勤しなければならない役人に対して、隠棲生活の気楽さを誇る意味が込められております。**「」**を紹介いたします。

**春眠不覺曉　　　 を覚えず**

**處處聞啼鳥　　　 を聞く**

**夜來風雨聲　　　 の声**

**花落知多少**　　　**花 落つること んぬぞ**

　は、役人生活の後半は、名目的な官職につき、広大な別荘地である「」に居住して「」の生活を送りました。そこで作られた詩の中で、親友のと共に同じ題で作った「二十首」は有名です。その中の「」は、「」に継いで有名で、隠逸生活の様子を巧みに表しています。**「竹里館」**を紹介いたします。

**獨坐幽篁裏　　　りす の**

**彈琴復長嘯　　　をじてす**

**深林人不知　　　 らず**

**明月來相照**　　　**たりてらす**

は、役人なって間もなくに赴任し、そこで、毎日のように妓楼に出入りした生活を送りました。その後、地方周りをした後で中央に戻り、隠棲生活を送ったことはありませんでしたが、老境に入って、往時とその時の心境の差を「「禅院に題す」と言う詩に表しております。**「」**の語源となった絶唱です。

**觥船一棹百分空　　　すれば し**

**十歳青春不負公　　　の にかず**

**今日鬢絲禪榻畔　　　 の**

**茶烟輕颺落花風**　　**くる の**

　隠逸生活へのあこがれは、日本にもありました。そのひとつの方法は出家して僧としての生活を送ることでした。その代表者として西行があります。西行は、という北面の武士でしたが、２３歳で妻子を捨てて出家し、僧として又風流人として過ごしました。和歌の達人として知られ、勅撰和歌集に採られているほか、『』があります。世捨て人となっても、昔のことは忘れがたかったようです。このことを詠った和歌を紹介いたします**。**

**山里にうき世いとはむ友もがな　しく過ぎし昔かたらむ**

　また、その隠逸生活は、中国の詩人達のようにからりとしたものでは無く、おりおりにつけ、寂しさ、悲しさを感じるものでありました。このことを詠った紹介いたします。

**山里は秋のすゑにぞ思ひしる　悲しかりけり木がらしの風**

日本では、西行の他にも、隠逸生活を送るには、僧になる例が多かったようです。典型的な隠逸生活者はでした。山中では動物たちと戯れ、村に出てきては子供達と一緒に一日を過ごす気ままな生活を送っておりました。

　その様子を詠った詩**「」**を紹介いたします。

**無欲一切足　　　欲 無ければ一切 足り**

**有求万事窮　　　求むる有らばす**

**淡菜可療饑　　　 をやすべく**

**衲衣聊纏躬　　　 かにう**

**独往伴糜鹿　　　 きてをとし**

**高歌和村童　　　してにす**

**洗耳巌下水　　　耳を洗ろうの水**

**可意嶺上松**　　**に可なりの松**

良寛の悠々自適な生活を詠った詩をもう一首紹介いたします。夏の雨上がりの朝に散歩に出掛けるときの詩であり、格調の高い律詩です。この詩「早秋の作」を紹介致します。

**荒村淋漓一夜雨　　　たり の雨**

**今朝草堂繁暑収　　　 収まる**

**窓中削玉遠山色　　　 玉をるの色**

**戸外拖練長江流　　　 をくの**

**巖下清泉洗病耳　　　の を洗い**

**樹梢寒蝉吟素秋　　　のをず**

**預理杖錫試散歩　　をめ に散歩すれば**

**玆自風月正悠悠**　　　**にたらん**

このような自由な生活を送る良寛も、ときどき寂しさを感じることがあったようで、**「芭蕉夜雨の作」**にその心情があらわされております。この詩を紹介致します。

**昏夢易驚老朽質　　　 驚き易し の**

**燈火明滅夜過央　　　灯火 明滅して 夜を過ぐ**

**撫枕静聞芭蕉雨　　　枕をで静かに聞く 芭蕉の雨**

**与誰共語此時情**　**誰と共に語らん此の時の**

　良寛には、同じ心情を詠った和歌があります。この和歌を紹介致します。

**世の中に同じ心の人もがな 草のいほりに一夜かたらむ**

も、王維と同じように、晩年は洛陽のに住み「半官隠逸」の生活を送りました。４０歳代でに左遷されたときに作られた**「、新たにをし、初めて成 にす」**は、隠逸生活の詩とされ、清少納言の故事で有名ですが、実際には、閑職の身を歎いた詩であることが判明しております。この詩を紹介吟詠いたします。

**日高睡足猶慵起**　　　**日高くり足りて 起くるにし**

**小閣重衾不怕寒**　　　**にを重ねてをれず**

**遺愛寺鐘欹枕聴**　　　**のは枕をてて聴き**

**香炉峰雪撥簾看**　　　**の雪はをげて看る**

**匡盧便是逃名地**　　　**はちれ 名をるるの地**

**司馬仍為送老官**　　　**は いを送るの官たり**

**心泰身寧是帰處**　　　**くきは れ帰する**

**故郷何独在長安**　　　 **ぞり 長安にのみ在らんや**

　白居易が、真に「半官隠逸」を詠った詩のひとつに「」があります。都会は賑やかすぎるが、山丘は寂しすぎる。だから、半官半隠の生活をし、忙しい生活を送るのでもなく、暇すぎる生活を送るのが一番良いと詠っています。**「中隠」**の最初の部分を 紹介いたします。

**大隠住朝市　　　はにみ**

**小隠入丘樊　　　はにる**

**丘樊太冷落　　　はだ**

**朝市太囂諠　　　はだ**

**不如作中隠　　　かずとりて**

**隠在留司官　　　れてのにるに**

**似齣復似處　　　ずるにてたるにる**

**非忙亦非閑**　　　**にずしてたにず**

白居易の隠棲生活は、歳と共に深まっていきました。晩年、もうこれ以上の富は要らない、完全に隠棲生活に入ろうという意志を**「自らに題す」**という詩に表しております。しかしながら、酒とは縁が切れなかったようです。

**野鶴一辭籠**　　　**たびをし**

**虛舟長任風**　　　**ににす**

**送愁還鬧處**　　　**いをりてにし**

**移老入閑中**　　　**をしてにる**

**身更求何事**　　　**にをかめん**

**天將富此翁**　　　**にのをましむ**

**此翁何處富**　　　**ののにかむ**

**酒庫不曾空**　　　**つてしからず**

白居易が隠逸生活に入ってから作られた詩に「酒に対す五首」があります。最も有名なのが「其の三」で、普通「酒に対す」と言えばこの詩を言います。短い人生だから、大いに酒を飲んで楽しもうということを荘子の事例を引きながら歌いあげています。

**蝸牛角上爭何事　　　 をか争う**

**石火光中寄此身　　　 の身を寄す**

**隨富隨貧且歡樂　　　富に随い 貧に随いくせん**

**不開口笑是癡人　　　口を開いて笑わざるはれ**

　役人生活を止めてから隠棲し、酒を愛した人に唐の詩人がいます。杜甫の「」に「の万銭を費やす」として詠まれているほどの酒好きでした。隠棲した後**「をめて作る」**という詩を作りました。今からは聖人の道を歩み、酒を楽しんで生きて行こうと詠っています（「飲むこと長鯨の百川を吸うが如し」の状態から、本当に止められたのかは疑問ですが）。この詩は「」の語源となっています。

**避賢初罷相　　　を避けて初めてをめ**

**樂聖且銜杯　　　聖を楽んでらく杯をむ**

**為問門前客　　　為に問う　門前の**

**今朝幾箇來**　　 **か来る**

金の詩人が、隠逸生活を詠った詩に「」があります。全対格の詩であり、山中の庵から見た風景を詠っています。

**鷺影兼秋靜　　　 にわえ**

**蟬聲帶晩涼　　　 をぶ**

**陂長留積水　　　 長くして をめ**

**川闊盡斜陽**　　**川 くして 尽く**

出家しながら世をすてきれなかった西行に対して、綺麗さっぱりと俗世間を忘れ、山居生活を謳歌する僧侶もありました。がその人です。潮音禅師の和歌は、俗世間を超越した真理を表しています。

その和歌、二首を紹介いたします。

**山深く隠れてからはしられけれ　うきよのはしのわたりがたきを**

**老の身は山のおくこそ住よけれ　こころまかせのふるまいをして**

唐の詩人は、「」の故事で有名なと共に、俗世間をさけた郊外に赴き「**とす」**という詩に、その心境を表しています。

**水北原南草色新　　　 新たなり**

**雪消風暖不生塵　　　雪消え風暖かにしてを生ぜず**

**城中車馬應無數　　　城中の車馬 に無数なるべきも**

**能解閑行有幾人**　　　**くを解するはか有る**

　実際に隠逸生活に入らなくても、隠逸な生活に憧れ、ひとときの間、山に籠もって俗世間の煩わしさを忘れるのもひとつの楽しみです。は、この楽しみを詠った「山居」という詩を作っております。管弦の音がなくても、山中にはの歌が静に聞こえてきて、眠りをさそうようであるという、山中の趣を詠った詩です。**「山居」**を紹介いたします。

**靑山高聳白雲邊　　　 高くゆ の**

**仄聽樵歌忘世縁　　　かにをいて を忘る**

**意足不求絲竹樂　　　 足りて 求めず　 の樂しみを**

**幽禽睡熟碧巖前**　　 **りは熟す　の前**

中国のもこのような文人の一人であり、隠逸生活への憧れを**「」**と言う詩に表しております。釣りを止めて返って来たが、舟を係留せずに、このまま眠ってしまおう。舟が何処に流されてようと、所詮、葦の花浅瀬だからと言う、気ままな生活を詠っています。この詩を紹介いたします。

**釣罷歸來不繋船　　　りをめりたりてをがず**

**江村月落正堪眠　　　ちてにるにえたり**

**縱然一夜風吹去　　　 きるとも**

**只在蘆花淺水邊**　　**だのにらん**

杜牧も、隠逸生活に憧れ、「ににかんとして**「に登る」**という詩を作っております。天下太平の時に味があるのは無能者であるが、自分もそうであり、白雲を眺めたり、僧と話したりするのが楽しいと詠っています。

**清時有味是無能　　　に味有るは れ無能**

**閒愛孤雲静愛僧　　　かにを愛し静かに僧を愛す**

**欲把一麾江海去　　　をって に去らんと欲し**

**樂遊原上望昭陵　　　 を望む**

唐の詩人は、**「」**という詩の中で、朝寝坊をしながら、長安の南にあ里隠棲の地とされるを眺めて、詩の推敲をし、そのときの外の景色を詠っています。隠逸生活の気楽さに、の「」の影響がみらます。この詩を紹介いたします。

**爾來中酒起常遲　　　酒にりて くること常に遲く**

**臥看南山改舊詩　　　して を看て を改む**

**開戸日高春寂寂　　　戸を開けば 日 高くして 春**

**數聲啼鳥上花枝**　　**数声の にる**

明の詩人光も若くして隠棲生活に入りましたが、その生活振りを**「」**という詩に詠いました。この詩にも、孟浩然の「春暁」の影響があります。

**井桁烏啼破曙煙　　　 烏いてを破る**

**輕寒薄被落花天　　　 　の天**

**閒人晴日猶無事　　　 無事なり**

**風雨今朝正合眠**　　　 **に眠るし**

唐の詩人は、老後の隠棲生活を「」という詩に詠いました。何もせずにのんびりとした生活を送ることの楽しさが詠われています。結句には、陶淵明の**「飲酒其の五」**の影響が見られます。

**百歲老翁不種田　　百歲の老翁 田をえず**

**惟知曝背樂殘年　　だ知るしを楽しむを**

**有時捫虱獨搔首　　時有りてをりてり首をき**

**目送歸鴻籬下眠　　をしてに眠る**

　宋の政治家で詩人としても知られるは、隠棲してるという人の家を尋ね、その生活振りを**「先生のに書す」**という詩に詠いました．風光明媚な地で、田畑を耕し手生活している隠者の生活振りが良く表されています。

**茆簷長掃靜無苔　　　 にって にして無し**

**花木成畦手自栽　　　 をして 手 う**

**一水護田將緑繞　　　 田をり 緑を ってり**

**兩山排闥送青來**　　**を排し　を送り来たる**

宋の時代、は西湖の孤山に隠棲し、梅を妻とし、鶴を子として生活しました。その心境を**「孤山の隠居 壁に書す」**という詩に表しております。人はおろか、猿や鳥もいない孤山に移り住もうとする理由を述べています。

**山水未深猿鳥少　　　 だ深からずなり**

**此生猶儗别移居　　　の生 お别に居を移さんとす**

**直過天竺溪流上　　　直ちに溪流の上を過ぎ**

**獨樹爲橋小結廬**　　**を橋と爲し小さくを結ぶ**

林逋が、梅の花を詠った**「山園小梅」**は、絶唱とされ、高啓の「梅花」とともに、梅の花を詠った双璧とされています。特に、その頷聯の二句は、供に茶席の禅語とされ、「」「」は、梅の代名詞とされています。「山園小梅」を紹介致します。

**衆芳搖落獨暄妍　　　 して り**

**占盡風情向小園　　　風情を占め尽くして 小園に向かう**

**疎影橫斜水淸淺　　　 水**

**暗香浮動月黄昏　　　 浮動 月**

**霜禽欲下先偸眼　　　りんと欲して 先ず眼をみ**

**粉蝶如知合斷魂　　　 如し知らば にをつべし**

**幸有微吟可相狎　　　幸いにの るべき有り**

**不須檀板共金尊**　　**いず とと**

南宋の田園詩人と言われるは、隠逸の、春夏秋冬の田園生活を詠った**「」**と言われる六十首の詩を作っております。そのうち、「冬日其の一」紹介致します。農村ののんびりとした生活が詠われております。

**斜日低山片月高　　　 山にれて 高し**

**睡餘行藥繞江郊　　　の をる**

**霜風掃盡千林葉　　　 い尽くすの**

**閒倚笻枝數鸛巢**　　　**ににりて を数う**

　　続きまして**「冬日其の二」**を紹介致します。「自分は、日に曝されてぬくぬくのんびりした生活を送っているのに、役人は､北風が吹く寒い中を、馬を走らせている。」と、隠逸生活の喜びを詠っています。

**炙背檐前日似烘　　　背をにれば 日 るに似たり**

**煖醺醺後困蒙蒙　　　まりてとして じて**

**過門走馬何官職　　　門をぐる 何の官職ぞ**

**側帽籠鞭戰北風**　**をて鞭をめ にく**

　明の詩人は、その隠逸生活を**「」**という詩に表しております。

同時に作られた律詩から、酒宴が終わり、客が帰った後の作であることが分かります。自分一人の世界が戻り、安堵感がうかがわれる詩です。

**酒闌客散小堂空　　　酒つき 散じて しく**

**旋捲疎簾受晩風　　　にをきて を受く**

**坐久忽驚涼影動　　　すこと 久しくして 驚く**

**一痕新月在梧桐**　　　**の動くを　の新月 に在り**

　明の詩人は、やはり山居における悠悠とした感情を**「」**という詩に詠っております。この詩を紹介します。

**欲買渓山不用銭　　　を買わんと欲して を用いず**

**倦来高枕白雲邊　　　みって 枕を高うす の**

**吾生此外無他願　　　吾が生は の　他の願い無し**

**飲谷棲丘二十年**　　**谷に飲み丘にむ 二十年**

　山に住む趣を詠った和歌、三首を紹介致します。中国におけるゆったりとした感情に比較して、安逸な生活の中に寂しさを詠ったものが多いようです。

**やまさとは松の声のみききなれてかぜふかぬ日はさぶしかりけり　（大田垣蓮月尼）**

**山里は冬ぞ寂しさ まさりける　人目も草も かれぬと思へば 　（源宗于）**

**さびしさに堪たへたる人のまたもあれな　庵ならべむ冬の山里　　｛西行法師｝**

は、での生活を詠っております。昔、世間に住んでいた頃には、多少の功名を立てようとしたものだが、それは、今では、の雨の音のように去ってしまい、隠逸の生活を送ろうと詠っています。

林葉飄風瑟瑟鳴　　　 **風にってとして鳴る**

虡窗唯見一燈明　　　 **見る の明らかなるを**

人間多少功名夢　　　 **多少 功名の夢**

化作山房夜雨聲　　　**して の声とる**

は、致仕して仏門に入り、隠棲生活を送り、その心境を**「」**と言う詩に詠いました。ここでも、がの国を去るときに小舟に乗って去った故事が引用されています。この詩を紹介致します。

**三十年來朝市塵　　　 の**

**片舟歸去五湖春　　　 帰り去る の春**

**平生慚愧無功業　　　 す 無きを**

**合對白鷗終此身**　**にに対しての身をえん**

幕臣であったは致仕した後に隠棲生活に入り、その悠々自適の生活を**「秋尽く」**と言う詩に詠いました。この詩を紹介致します。

**靜裏空驚歳月流　　　 しく驚く 歳月の流るるに**

**閑亭独座思悠悠　　　にして思いたり**

**老愁如葉掃難盡　　　 葉の如く 掃えども尽き難く**

**蔌蔌聲中又送秋　　　　 又秋を送る**

　も、老後の隠棲生活での冬の日の思いを**「冬暖かし」**という詩に表しております。ひたすら書を書き写す楽しみに浸った生活であったようです。この詩を紹介致します。

**烘窻愛日気如蒸　　　窓をる 気　すが如し**

**不覚抄書至点燈　　　覚えず して に至るを**

**誰与衰翁同此喜　　　誰かとの喜びを同じくせん**

**硯池淺處有冬蠅**　　　 **浅き処 冬の有り**

明治の二大詩人と言えば、夏目漱石と乃木希典が挙げられます。夏目漱石も、俗世家を離れた閑適な生活に憧れておりました。老年になった、益々その思いは強くなり、その心境を**「」**に表しております。「春日偶成」を紹介いたします。

**莫道風塵老　　　うかれ に老ゆと**

**當軒野趣新　　　に当たりて たなり**

**竹深鶯亂囀　　　竹深くして 乱れり**

**淸晝臥聽春**　　　 **して春を聴く**

乃木希典は、病弱なために度々休職し、で晴耕雨読の生活を送りました。そのような有様を**「那須野三首」**に表しております。三首は同じ韻字を同じ位置で使う「次韻」という高度な技法で作られておりますが、いずれも質素な隠棲生活が表されております。そのうちのひとつを紹介致します。

**寒厨寧歎食無魚　　　 ぞかんにきを**

**手植新蔬味有余　　　の　りり**

**一縷香烟凝不動　　　の りてかず**

**疏簾隔雨読農書**　　 **をててをむ**

　「富士山」で知られる石川丈山も、浅野家に使えた後致仕し、京都郊外に隠棲しました。その生活を**「閑適」**という詩に残しております。この詩の紹介を最後に、「閑適を詠う」を終わります。

**静觀風物感年遷　　　をしてのるにじ**

**終日澹然憑榻眠　　　 としにりてむる**

**庭院無人春晝永　　　 くく**

**遊禽來往落花邊　　　 すの**

（令和２年９月２２日作成）

参考文献等

　『白楽天１００選』石川忠久著、ＮＨＫライブラリー出版

　『中国漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『日本漢詩吟詠全集　絶句編』後藤石韜緒、有限会社吟濤社出版

　『和漢名詩選評釈』簡野道明著、明治書院出版

　ブログ「千人万首　資料編　和歌に影響を与えた漢詩文」

<http://www.asahi-net.or.jp/~sg2h-ymst/yamatouta/sennin/kansi.html#kansi>